

目的 喜多方地方は、会津若松市から北へ約20キロの位置にあり、かつては北方とも書かれた地名の由来ともなる。同じ会津盆地内にあり、会津藩主の支配下のもとに地の利を生かした特異な職種(型染め)がこの藪の街から誕生した。その歴史は古く、明治以前のころから紅州、伊勢白子につぐ型染めの産地として栄え、その営業範囲も東北地方の各地に渡り広く販売されて、安政時代後期から、昭和初期までの長い間、営業販売を続けていた。会津型染めとして数多くの型紙と、これらに関する資料が残存しているので、それらの型染めの特徴をさぐりながら考察を加える。

方法 資料として 売立帳、大福帳、店調帳 当座帳等約30冊(小野寺家)を対象にする。又数多くの型染紙各種数について調べる。その他文献を参考にする。

結果 多量の染型紙を模様別に分ける。小紋、小紋中型、縞、中型、その他に分類される。会津型の特徴は、餅瓦に図柄が彫られた型染めである。明治後期全国的に餅柄が流行したが、東北地方には当時織りによる縞の技術が乏しく、その他のことも影響して縞織りは見られず、餅瓦な型染めによる東北地方独自の味わいのある型染めとして発達して、衣生活の中に密着して、日常着、仕事着、街着等に盛んに利用された。現在でもこの会津型染めにみせられてグループが現れ、復刻して型彫を始め、染めについて研究を行っている。今回はこの餅瓦な中型模様について、分類をして考察をした。